
その時、「お前は医者じゃないのか！」という声が聞こえました
(菅野武、海堂尊・監修：救命 東日本大震災、医師たちの奮闘、2011、7-34)

2018年1月26日、災害医学抄読会 <http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/>

菅野氏は仙台市出身で、自治医科大学を卒業後、宮城県栗原市立栗原中央病院を経て、2009年4月より南三陸町の公立志津川病院に医長として2年間勤務していた。2011年3月には任期を終えて、東北大学大学院に進学を予定していた矢先に震災に直面したのである。

あの日、2011年3月11日は、いつもと変わらぬ金曜日になるはずであった。午後2時からの回診を終えて医局のデスクに戻ったのが、2時40分過ぎのことであった。いきなり強烈な縦に突き上げる揺れがきて、ほとんど同時に携帯の緊急地震速報が鳴り、その音が消えないうちに横に大きく揺れ始めた。時刻は、午後2時46分。医局では本棚が倒れて隣のデスクのパソコンにあたり、火花が飛び散った。

地震で電源は落ちたものの、すぐ非常用電源が作動した。酸素吸入器や必要最低限の機械は動いていた。この時点で患者さんやスタッフに負傷者や死亡者はいなかった。しかし、安堵したのもつかの間、今度は町内無線で津波警報が発令された。すぐに患者さんたちを5階へ運び始めた。病院の建物は、1960年のチリ地震津波の教訓を生かして建設されていた。6メートルの津波を基準にして病室を3階以上に設け、安全を期していた。また、海から400メートルほど離れているうえ、海岸線に松原、病院の手前には比較的大きな建物があるので、それらが防波堤の役割を果たしてくれるのではないかと考えていた。しかし、東北地方を襲った天災は人間の予想を超えるすさまじさであった。

波はすさまじい海鳴りを伴って高まった次の瞬間、松原を軽々と越えてしまった。茶色い巨大な壁が病院にぶち当たり、建物を揺らした。そして、たちまち4階の病室の天井まで水浸しになった。そして、濁流の衝撃の瞬間に、たくさんの人たちが泥の水に呑み込まれてしまった。このとき、階下の人を助けられなかった自分に対する激しい怒りが襲った。圧倒的な絶望感と無力感にも苛まれた。自分もこのまま死んでしまうのではないかという考えまで浮かんでいた。しかし、死を覚悟したからこそ最後は人間として、同時に医者として誇りをもって死んでいこう、頑張ろうという気持ちがわきおこってきたのである。

入院患者107名中、5階に避難できたのは42人であった。初日に生き残ったのは医者を含めた病院のスタッフが76人、周囲から避難してきた人が114人の総勢232人であった。酸素や点滴、吸引機など最低限の医療品すらないということが、患者さんのデッドラインを分けてしまった。避難から1時間後、ある女性は呼吸状態が悪化して亡くなった。他にも空

息や低体温で6人の方が1日目に死亡した。医者としてできたのは医療行為ではなく、励まし寄り添うということだけであった。今後、津波の危険地域にある病院は最上階に電源と医療器具、薬、食糧、水を必ず備蓄しておかなければならない。残された少ない水と食糧を分け合いながら、2時間おきにみんなで足踏みをした。寝たきりの患者さんは、看護師さんが足を持って動かした。エコノミークラス症候群の防止と同時に、寒い季節だったので身体を動かせば温まるし、気も紛れる。

自衛隊のヘリが救助に到着したのは12日の午後であった。地震と津波からはほぼ24時間経った頃であった。しかし、ヘリが一度に運べるのは15人が限度、寝たきりの患者さんは6人ほどになる。患者さんの搬送の順番を決定するのも役割の一つであった。優先順位の高いのは、15人いた透析患者さんであった。次に酸素吸入をしている患者さんと、寝たきりの患者さんを優先的に搬送した。3日目の13日には自衛隊によって届けられた食事をとることができ、午後にはヘリで最後の患者さんと一緒に救助された。この時も、地震と津波のことはまだ整理できていなかった。患者さんを可能な限り搬送できたという、少しの達成感もあるが、それ以上に多くの患者さんを失ったという腹立ちの方が強烈であった。ヘリで向かった先は石巻赤十字病院であった。次々に各地から患者さんが搬送され、ベッドが足りないので廊下にも患者さんが寝かされるなど、戦場と化していた。

その後、実家の仙台に戻った。全く連絡が取れていなかった妻と再会すると、妻は絶句してしまった。何も言える言葉がなく、お互いに突っ立ったまま無言で泣いた。長男が生まれたのは、その3日後のことである。息子の元気な産声を聞いて、勇気もらった。と同時に、心を揺さぶられた。こんな大変な状況でも、新しい命は生まれてくるのである。仙台に戻ってからずっと眠れていなかったが、息子が生まれてからは嘘のように眠れるようになった。振り切れていた針が戻されたというか、ようやく精神的に平常になれた気がした。

その後、南三陸町に戻り避難所での医療活動を行ったが、その中で特に印象に残っているのは、イスラエル医療団の皆さんのことである。医療団の幹部の一人の方が「真のリーダーとは、明日を生きる希望を与えることができる人のことだ」という話をされた。全てが流されて無くなってしまう状況だからこそ、みんなで寄り添って頑張ろうと旗を振ったことが医療行為以上に大事だったと話された。何もできなかった人がいても、その人を責めるようなことはしない方がいいとも言っていたら、心の重荷が下りたような気持になった。

医師であり、極限の場で闘う経験を積んだだけでなく、この上もなく心優しい同志に心情と行動をわかってもらえたことが、とてつもなくありがたかったし、励みになった。生き残っている者として、震災での体験を全世界の人々に伝えなければいけないと思う。またそれが同時に自分の中で少しずつ気持ちの整理をつけることにつながるだろう。